

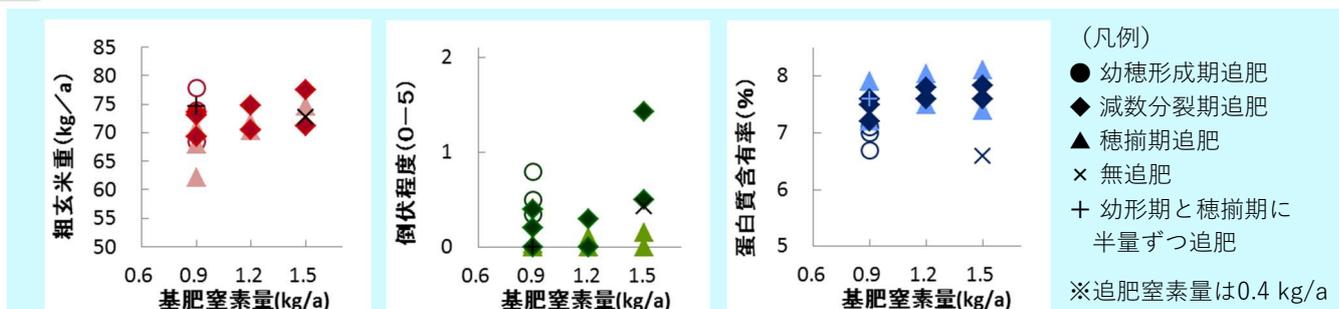
飼料用米品種「えみゆたか」を安定生産するための栽培法

－倒伏させずに、安定多収を目指す－

農林総合研究所

早生飼料用米品種「えみゆたか」（系統名:「ふ系237号」）は、過剰な多肥栽培では倒伏が懸念されるため、倒伏させず、多収で、タンパク質含有率の変動を少なくする栽培法について検討したので、紹介します。

「えみゆたか」の栽培特性



注) 施肥窒素量(kg/a)は、基肥0.9kg+追肥0.4が地帯施肥基準の1.4倍、1.2+0.4は1.8倍、1.5+0.4は2.1倍に相当します。

基肥窒素量0.9kg/aでは、幼穂形成期の追肥で多収となりますが、倒伏程度は高く、玄米のタンパク質含有率は低くなります。穂揃期追肥では収量が低くなる場合があります。

基肥窒素量1.2kg/aでは、減数分裂期から穂揃期の追肥で安定して多収で、倒伏が少なく、玄米のタンパク質含有率も高いです。

基肥窒素量1.5kg/aでは、減数分裂期から穂揃期の追肥で玄米タンパク質含有率は高いですが、減数分裂期の追肥では倒伏する場合があります。また、基肥窒素量が多いにもかかわらず、無追肥では玄米のタンパク質含有率が低くなります。

「えみゆたか」の栽培のポイント

- ◆ 施肥量：施肥窒素総量は地帯別施肥基準量の1.4～1.8倍（基肥7～8割、追肥2～3割）
- ◆ 追肥時期：減数分裂期または穂揃期
幼穂形成期の追肥では、倒伏が懸念されるだけでなく、玄米のタンパク質含有率が低くなります。
- ◆ 刈取適期：出穂期後の積算気温 1,000～1,350℃ごろ
籾の黄化程度90%以上、籾水分が25%以下になった時期。登熟期間が低温の年は黄化速度が緩慢になるため、籾水分を目安にします（データ略）。

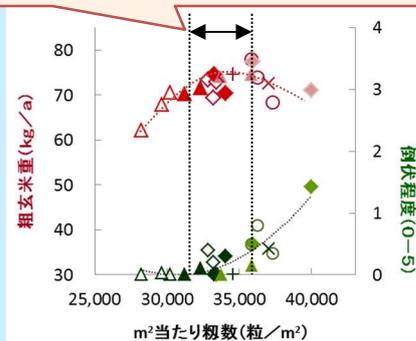
技術の活用・注意点

- ◆ 農林総合研究所藤坂圃場(十和田市)において、栽植密度80株/坪で得られたデータ(2016～2018年)を根拠にしています。
- ◆ 籾が一般うるち米品種より大きいため、播種量は10%程度増量してください。
- ◆ 減数分裂期は、幼穂形成期から10日目頃を目安とします。

*本成果は、農林水産省及び農研機構生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」の活用によるものである。

m²粒数 と 粗玄米重・倒伏

m²当たり粒数32,000～36,000粒で多収、かつ、倒伏は軽微



凡例 ○ 基0.9+0.4 (幼) ◆ 基1.5+0.4 (減)
◇ 基0.9+0.4 (減) ▲ 基1.5+0.4 (揃)
△ 基0.9+0.4 (揃) × 基1.5+無追肥
◆ 基1.2+0.4 (減) + 基0.9+0.2 (幼)
▲ 基1.2+0.4 (減) +0.2 (揃)

※数値は施肥窒素量(kg/a)、()内は追肥時期幼:幼穂形成期、減:減数分裂期、揃:穂揃期を表す。